

「コシヒカリBL」栽培ごよみ（平場）

◎品種特性

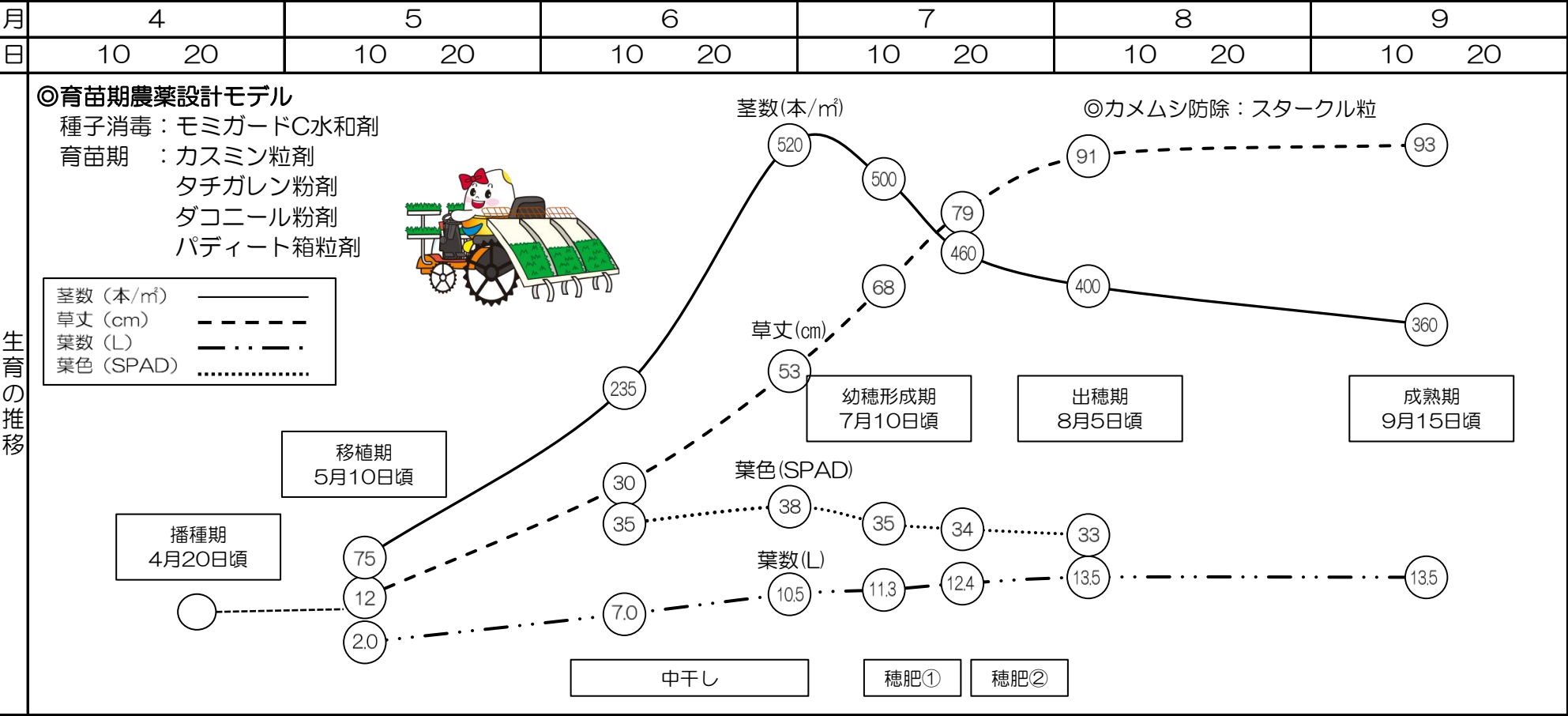
草型	中間
耐倒伏性	弱
紋枯病	やや強

◎540kg/10aの収量構成要素

穂 数	360本/m ²
1穂籾数	78粒
m ² あたり籾数	28,000粒
登熟歩合	86%
千 粒 重	22.5g

◎品質目標

1等級比率	95%以上
整粒歩合	85%以上
玄米タンパク含有率	6.0%（水分15%換算）



栽培のポイント

4～5月 ○登熟期の高温を回避し品質向上のため、4月下旬の播種及び5月中旬の田植えを実施 ・播種量 稚苗 160～175g/箱（催芽籾） ・稚苗は、20日間程度の育苗日数となるよう田植えに合わせて播種し健苗を育成 ・浸種は十分に行う（特に浸種初期水温10℃～15℃） ・いもち病、紋枯病の多発生地においては、育苗箱施用剤等による予防を実施 ・栽植密度50～60株/坪、1株3～4本植え ○茎数及び籾数過剰を防止するために、適正な元肥窒素量を施用	7～8月 ○いもち病・紋枯病の発生を確認したら速やかに防除する ・いもち病：ブラシン粉剤DL ・紋枯病：バリダシン粉剤DL ○出穂後好天による高温登熟が予想され、出穂期の葉色がSPAD値で31（葉色版で4.0）を下回ることが予想される場合、出穂3日前に窒素成分で1.0kg/10aいないを施用すると未熟粒が減少する
6月 ○分けつの発生状況を把握し目標穂数の7～8割の茎数を確保したら中干しを開始 ・50株 ⇒ 18本/株 ・60株 ⇒ 15本/株	7～9月 ○出穂25日後までは飽水管理を実施し、高温年は出穂30日後まで継続 9月 ○品質確保に向け、圃場ごとに籾の黄化率を確認し適期収穫を実施 ・黄化籾割合90% ・適正乾燥で胴割れ防止 ・出穂後の積算温度1,000℃ 収穫後（稲わら秋すき込み） ○稲わらの腐熟促進のため気温の高い10月中旬までに完了する ・深さは5～10cmの浅うち ・腐熟促進剤等の施用も効果的 ・すき込み後は、圃場の排水性を良くして稲わらの分解を促進

◎元肥の目安（成分量kg/10a）

土 性	N	P	K
粘土質	3.0	7.0	6.0
砂 質	4.0	8.0	8.0

※地力・生育量に応じて施肥量を加減する

◎追肥（穂肥）の目安（成分量kg/10a）

穂肥時期	N	P	K
出穂18日前	1.5	0.4	1.5
出穂10日前	1.5	0.4	1.5

※2回目穂肥実施後も異常高温による栄養凋落が予想される場合は、出穂前葉色診断を実施した上で、追肥の要否を検討する

◎土づくり肥料

肥 料 名			施用量 kg/10a	成分量 kg/10a			
				N	P	K	Si
一つ選択	元肥	えちご上越ソイル元気	40～ 60	－	8.0～ 12.0	1.4～ 2.1	4.4～ 6.6
		越後の輝きソイル米スター	30	－	0.3	2.1	9.0
		けい酸加里プレミアム34	50	－	－	10.0	17.0
	追肥	スーパーシリカプレミアム	30	－	－	－	9.0

※N:窒素、P:リン、K:加里、Si:ケイ素

☆施肥設計モデル

肥 料 名		施用量 kg/10a	成分量 kg/10a			
			N	P	K	Si
元肥・穂肥（分施肥体系）	土づくり肥料より一つ選択	（左記数値を参照）				
	元肥チャレンジャー10	30	3.0	6.0	4.5	－
	えちご上越専用 穂肥チャレンジャー	20	3.0	0.8	3.0	－
一発元肥体系	土づくり肥料より一つ選択	（左記数値を参照）				
	えちご上越 スーパーチャレンジャー100	30	5.4	4.2	4.2	－

※一発元肥体系でも、生育状況に応じて追肥（穂肥）を実施する

「こしいぶき」栽培ごよみ（平場）

◎品種特性

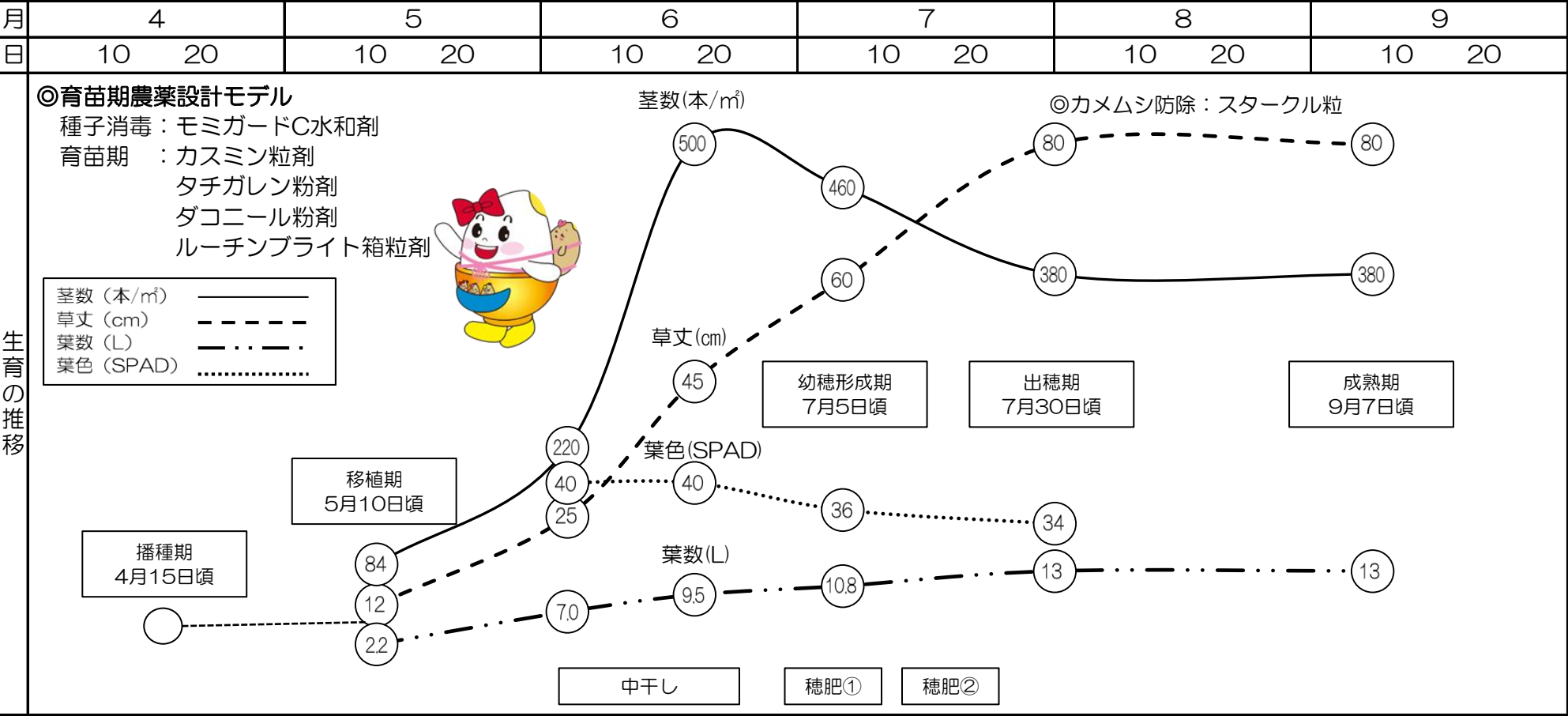
草型	中間
耐倒伏性	やや強
いもち病	中
紋枯病	弱

◎540kg/10aの収量構成要素

穂 数	380本/㎡
1穂籾数	75粒
㎡あたり籾数	28,500粒
登熟歩合	88%
千 粒 重	21.5g

◎品質目標

1等級比率	95%以上
整粒歩合	85%以上
玄米タンパク含有率	6.2%（水分15%換算）



栽培のポイント

4～5月

○生育量を確保するため、4月中旬の播種及び5月上旬の田植えを実施

- ・播種量 稚苗 160～175g/箱（催芽籾）
- ・稚苗は、20日間程度の育苗日数となるよう田植えに合わせて播種し健苗を育成
- ・浸種は十分に行う（特に浸種初期水温10℃～15℃）
- ・箱施用剤でいもち病、紋枯病の予防
- ・栽植密度50～60株/坪、1株3～4本植え

○茎数及び籾数過剰を防止するために、適正な元肥窒素量を施用

6月

○分けつの発生状況を把握し目標穂数の7～8割の茎数を確保したら中干しを開始

- ・50株 ⇒ 19本/株
- ・60株 ⇒ 16本/株

7～8月

○いもち病・紋枯病の発生を確認したら速やかに防除する

- ・いもち病：ブラシン粉剤DL
- ・紋枯病：バリダシン粉剤DL

○出穂25日後までは飽水管理を実施し、高温年は出穂30日後まで継続

9月

○品質確保に向け、圃場ごとに籾の黄化率を確認し適期収穫を実施

- ・黄化籾割合90%
- ・出穂後の積算温度975℃
- ・適正乾燥で胴割れ防止

収穫後（稲わら秋すき込み）

○稲わらの腐熟促進のため気温の高い10月中旬までに完了する

- ・深さは5～10cmの浅うち
- ・すき込み後は、圃場の排水性を良くして稲わらの分解を促進
- ・腐熟促進剤等の施用も効果的

◎元肥の目安（成分量kg/10a）

土 性	N	P	K
粘土質	3.0	7.0	6.0
砂 質	4.0	8.0	6.0

※地力・生育量に応じて施肥量を加減する

◎追肥（穂肥）の目安（成分量kg/10a）

穂肥時期	N	P	K
出穂18日前	1.5	0.4	1.5
出穂10日前	1.5	0.4	1.5

※2回目穂肥実施後も異常高温による栄養凋落が予想される場合は、出穂前葉色診断を実施した上で、追肥の要否を検討する

◎土づくり肥料

肥 料 名			施用量 kg/10a	成分量 kg/10a			
				N	P	K	Si
一つ選択	元肥	えちご上越ソイル元気	40～ 60	－	8.0～ 12.0	1.4～ 2.1	4.4～ 6.6
		越後の輝きソイル米スター	30	－	0.3	2.1	9.0
	追肥	けい酸加里プレミアム34	50	－	－	10.0	17.0
		スーパーシリカプレミアム	30	－	－	－	9.0

※N:窒素、P:リン、K:加里、Si:ケイ素

☆施肥設計モデル

肥 料 名		施用量 kg/10a	成分量 kg/10a			
			N	P	K	Si
元肥 ＋ 穂肥 （分施肥系）	土づくり肥料より一つ選択	（左記数値を参照）				
	高度化成オール14	25	3.5	3.5	3.5	－
	えちご上越専用 穂肥チャレンジャー	20	3.0	0.8	3.0	－
一発 元肥 体系	土づくり肥料より一つ選択	（左記数値を参照）				
	早生スーパー元肥 パワフル30	20	6.0	2.0	0.8	－

※一元肥体系でも、生育状況に応じて追肥（穂肥）を実施する

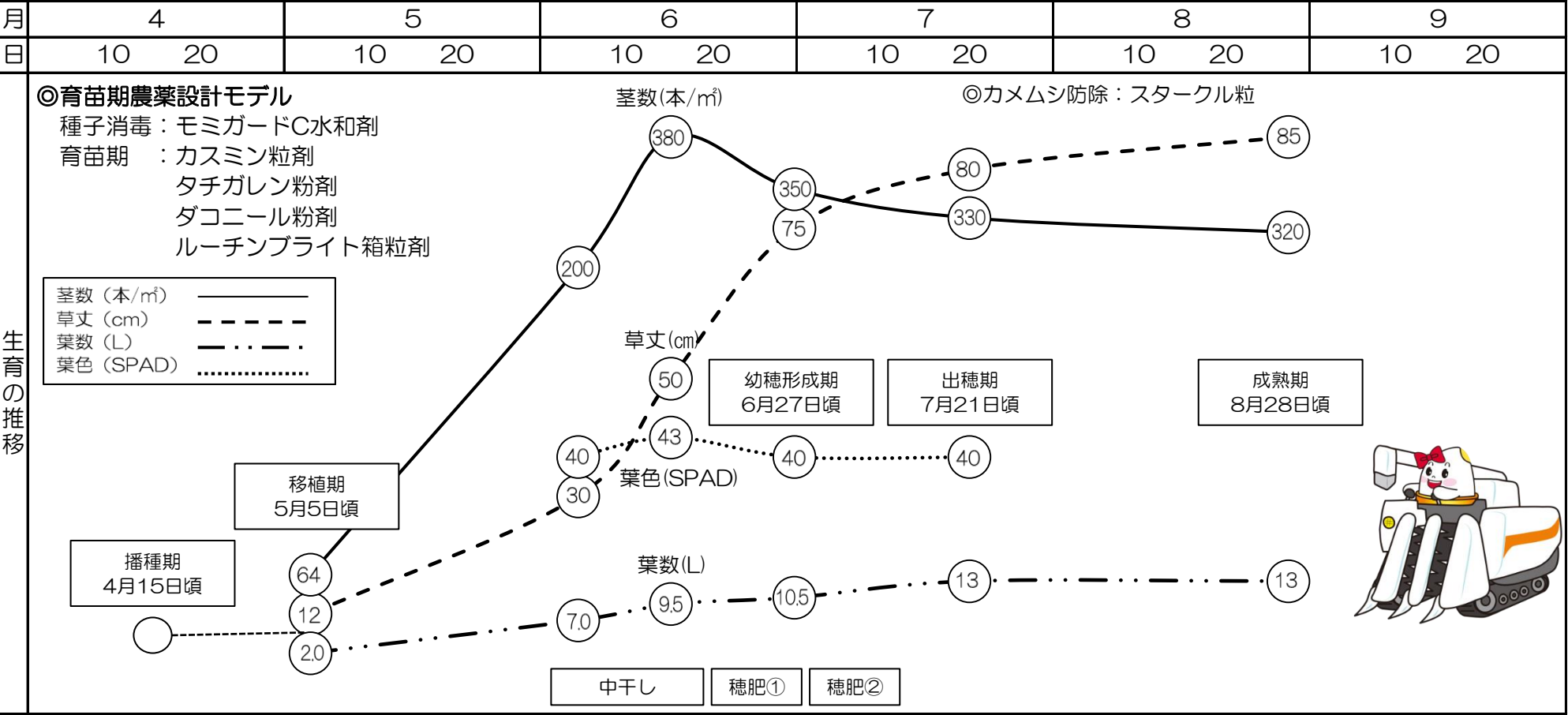
「つきあかり」栽培ごよみ（平場）

◎品種特性

草型	偏穂重
耐倒伏性	やや強
いもち病	中

◎630kg/10aの収量構成要素

穂 数	340本/㎡
1穂籾数	95粒
㎡あたり籾数	31,000粒
登熟歩合	88%
千 粒 重	24.0g



栽培のポイント

4～5月

○生育量を確保するため、4月中旬の播種及び5月上旬の田植えを実施

- ・播種量 稚苗 170～185g/箱（催芽籾）
- ・稚苗は、20日間程度の育苗日数となるよう田植えに合わせて播種し健苗を育成
- ・休眠が深い場合があるので、浸種は十分に行う（水温12℃で積算120℃）
- ・箱施用剤でいもち病、紋枯病の予防
- ・分けつが取りづらい品種のため、栽植密度60株/坪、1株3～4本植え

○多収の第一歩は、籾数確保の施肥設計（元肥はしっかりと、穂肥は遅れず）

6月

○分けつの発生状況を把握し目標穂数の8割の茎数を確保したら中干しを開始

- ・60株 ⇒ 15本/株

6～7月

○穂肥施用で、出穂期までの葉色（SPAD値）を40以上保つ
籾数過剰で腹白粒が出やすくなるので過度な施用は控える

7～8月

○いもち病・紋枯病の発生を確認したら速やかに防除する

- ・いもち病：ブラシン粉剤DL
- ・紋枯病：バリダシン粉剤DL

○出穂28日後までは飽水管理を実施し、高温年は出穂30日後まで継続

8～9月

○品質確保に向け、圃場ごとに籾の黄化率を確認し適期収穫を実施

- ・黄化籾割合90%
- ・適正乾燥で胴割れ防止
- ・出穂後の積算温度1,000℃～

収穫後（稲わら秋すき込み）

○稲わらの腐熟促進のため気温の高い10月中旬までに完了する

- ・深さは5～10cmの浅うち
- ・すき込み後は、圃場の排水性を良くして稲わらの分解を促進
- ・腐熟促進剤等の施用も効果的

◎元肥の目安（成分量kg/10a）

土 性	N	P	K
粘土質	6.0	6.0	6.0
砂 質	7.0	7.0	7.0

※地力・生育量に応じて施肥量を加減する

◎追肥（穂肥）の目安（成分量kg/10a）

穂肥時期	N	P	K
出穂30～25日前	2.0	0.5	2.0
出穂14日前	1.5	0.4	1.5

※2回目穂肥実施後も異常高温による栄養凋落が予想される場合は、出穂前葉色診断を実施した上で、追肥の要否を検討する

◎土づくり肥料

肥 料 名		施用量 kg/10a	成分量 kg/10a			
			N	P	K	Si
一つ選択 元肥	えちご上越ソイル元気	40～60	—	8.0～12.0	1.4～2.1	4.4～6.6
	越後の輝きソイル米スター	30	—	0.3	2.1	9.0
	けい酸加里プレミアム34	50	—	—	10.0	17.0
追肥	スーパーシリカプレミアム	30	—	—	—	9.0

※N:窒素、P:リン、K:加里、Si:ケイ素

☆施肥設計モデル

肥 料 名		施用量 kg/10a	成分量 kg/10a			
			N	P	K	Si
元肥・穂肥（分施肥体系）	土づくり肥料より一つ選択		（左記数値を参照）			
	高度化成オール14	40	5.6	5.6	5.6	—
	えちご上越専用穂肥チャレンジャー	23	3.5	0.9	3.5	—
一発元肥体系	土づくり肥料より一つ選択		（左記数値を参照）			
	早生スーパー元肥 パワフル30	30	9.0	3.0	1.2	—

※一発元肥体系でも、生育状況に応じて追肥（穂肥）を実施する

「みずほの輝き」栽培ごよみ（平場）

◎品種特性

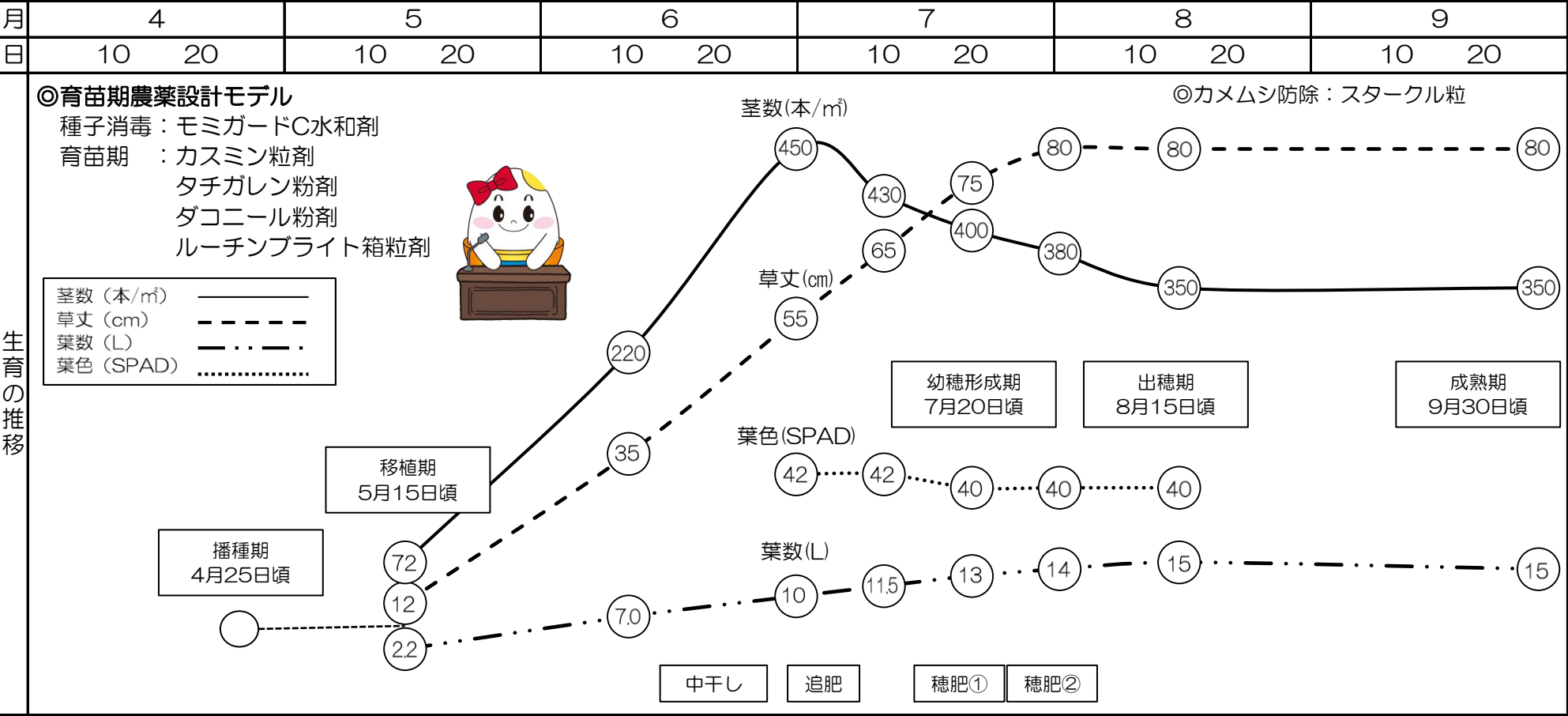
草型	中間
耐倒伏性	やや強
いもち病	やや強

◎540kg/10aの収量構成要素

穂 数	340本/㎡
1穂籾数	75粒
㎡あたり籾数	26,250粒
登熟歩合	90%
千 粒 重	25.5

◎品質目標

1等級比率	95%以上
整粒歩合	85%以上
玄米タンパク含有率	6.0%（水分15%換算）



栽培のポイント

4～5月

○適正生育量を確保するため、4月下旬の播種及び5月中旬以降の田植えを実施

- ・播種量 稚苗 170～185g/箱（催芽籾）
- ・稚苗は、20日間程度の育苗日数となるよう田植えに合わせて播種し健苗を育成
- ・浸種は十分に行う（特に浸種初期水温10℃～15℃）
- ・箱施用剤でいもち病、紋枯病の予防
- ・栽植密度50～60株/坪、1株3～4本植え

○収量性は高いが、品質・食味を最優先し極端な多肥栽培は行わない

○大豆後等の地力の高い圃場での栽培は避ける

6月

○分けつの発生状況を把握し目標穂数の7～8割の茎数を確保したら中干しを開始

- ・50株 ⇒ 17本/株
- ・60株 ⇒ 14本/株

6～7月

○生育期間が長いため、幼穂形成期まで葉色を維持する

- ・葉色40（SPAD値）を下回った場合、N成分で1～1.5kg/10a程度の追肥を行う（6月下旬～7月上旬）

7～8月

○いもち病・紋枯病の発生を確認したら速やかに防除する

- ・いもち病：ブラシン粉剤DL
- ・紋枯病：バリダシン粉剤DL

7～9月

○出穂25日後までは飽水管理を実施し、高温年は出穂30日後まで継続

9月

○大粒で胴割れしやすく、穂発芽性が「中」のため、圃場ごとに籾の黄化率を確認し適期収穫により品質の確保をする

- ・黄化籾割合90%
- ・出穂後の積算温度1,050℃～
- ・適正乾燥で胴割れ防止

収穫後（稲わら秋すき込み）

○稲わらの腐熟促進のため気温の高い10月中旬までに完了する

- ・深さは5～10cmの浅うち
- ・腐熟促進剤等の施用も効果的
- ・すき込み後は、圃場の排水性を良くして稲わらの分解を促進

◎元肥の目安（成分量kg/10a）

土 性	N	P	K
粘土質	5.0	3.0	3.0
砂 質	6.0	3.5	3.5

※地力・生育量に応じて施肥量を加減する

◎追肥（穂肥）の目安（成分量kg/10a）

穂肥時期	N	P	K
出穂25日前	1.5	0.4	1.5
出穂14日前	1.5	0.4	1.5

※2回目穂肥実施後も異常高温による栄養凋落が予想される場合は、出穂前葉色診断を実施した上で、追肥の要否を検討する

◎土づくり肥料

肥 料 名			施用量 kg/10a	成分量 kg/10a			
				N	P	K	Si
一つ選択	元肥	えちご上越ソイル元気	40～ 60	－	8.0～ 12.0	1.4～ 2.1	4.4～ 6.6
		越後の輝きソイル米スター	30	－	0.3	2.1	9.0
		けい酸加里プレミアム34	50	－	－	10.0	17.0
	追肥	スーパーシリカプレミアム	30	－	－	－	9.0

※N:窒素、P:リン、K:加里、Si:ケイ素

☆施肥設計モデル

肥 料 名		施用量 kg/10a	成分量 kg/10a			
			N	P	K	Si
元肥 ・ 穂肥 （分 施 体 系）	土づくり肥料より一つ選択	（左記数値を参照）				
	高度化成オール14	40	5.6	5.6	5.6	－
	えちご上越専用 穂肥チャレンジャー	20	3.0	0.8	3.0	－
一 発 元 肥 体 系	土づくり肥料より一つ選択	（左記数値を参照）				
	晩生用高窒素一発元肥	30	9.0	3.0	1.5	－

※一発元肥体系でも、生育状況に応じて追肥（穂肥）を実施する

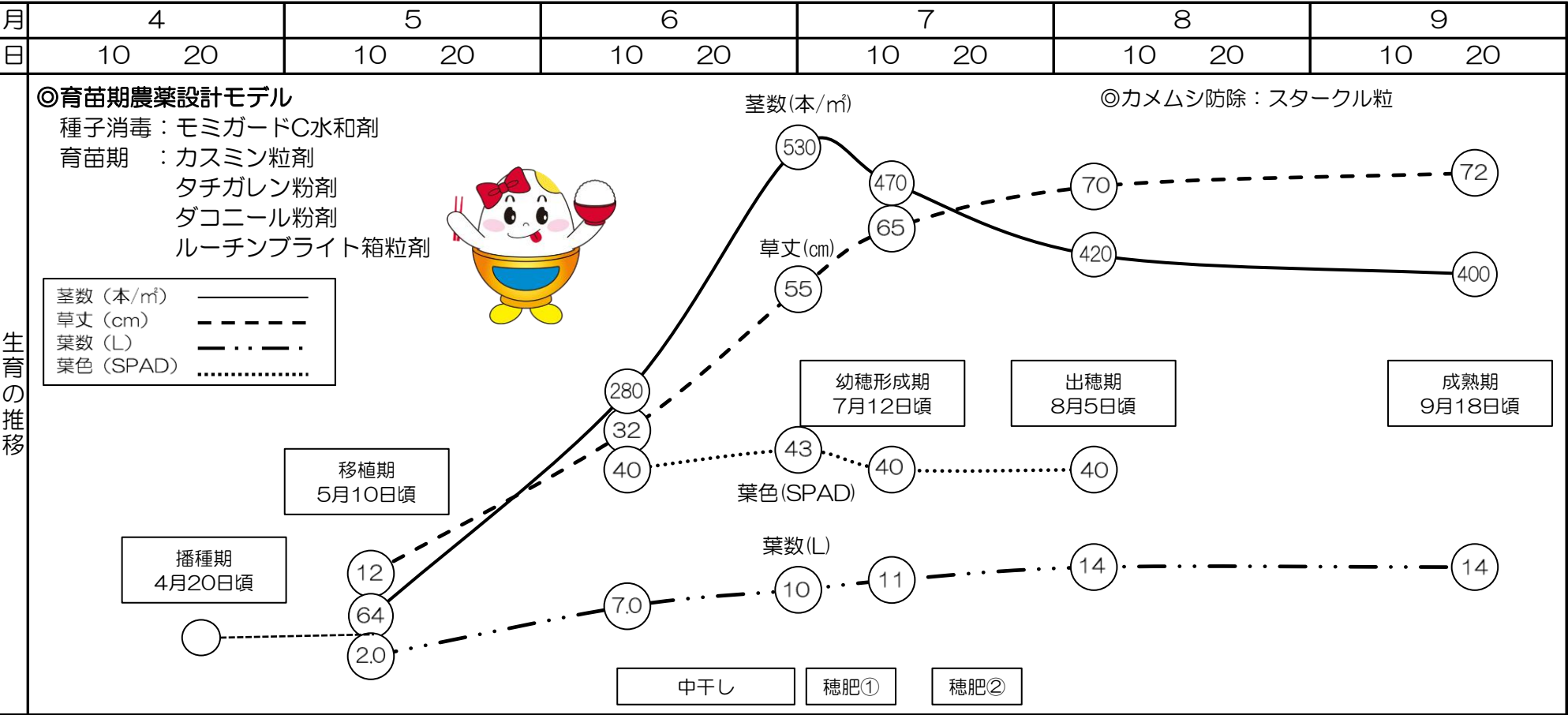
「にじのきらめき」栽培ごよみ（平場）

◎品種特性

草型	中間
耐倒伏性	強
いもち病	中
高温耐性	やや強
耐冷性	弱

◎650kg/10aの収量構成要素

穂 数	400本/㎡
1穂籾数	82粒
㎡あたり籾数	33,000粒
登熟歩合	85%
千 粒 重	23.5g



栽培のポイント

4～5月

○適正生育量を確保するため、4月下旬の播種及び5月中旬以降の田植えを実施

- ・播種量 稚苗 170～185g/箱（催芽籾）
- ・稚苗は、20日間程度の育苗日数となるよう田植えに合わせて播種し健苗を育成
- ・浸種は十分に行う（特に浸種初期水温10℃～15℃）
- ・箱施用剤でいもち病、紋枯病の予防
- ・栽植密度60株/坪、1株3～4本植え

○多収の第一歩は、籾数確保の施肥設計（元肥はしっかり、穂肥は遅れず）

6月

○分けつの発生状況を把握し目標穂数の7～8割の茎数を確保したら中干しを開始

- ・60株 ⇒ 17本/株
- ・50株 ⇒ 21本/株

7月

○幼穂形成期に低温が予想される場合は深水管理を実施

○穂肥施用で、出穂期までの葉色（SPAD値）を40以上保つ

7～8月

○いもち病・紋枯病の発生を確認したら速やかに防除する

- ・いもち病：ブラシン粉剤DL
- ・紋枯病：バリダシン粉剤DL

7～9月

○出穂28日後までは飽水管理を実施し、高温年は出穂30日後まで継続

9月

○品質確保に向け、圃場ごとに籾にの黄化率を確認し適期収穫を実施

- ・黄化籾割合90%
- ・適正乾燥で胴割れ防止
- ・出穂後の積算温度1,100℃～1,200℃

収穫後（稲わら秋すき込み）

○稲わらの腐熟促進のため気温の高い10月中旬までに完了する

- ・深さは5～10cmの浅うち
- ・腐熟促進剤等の施用も効果的
- ・すき込み後は、圃場の排水性を良くして稲わらの分解を促進

◎元肥の目安（成分量kg/10a）

土 性	N	P	K
粘土質	7.0	7.0	7.0
砂 質	8.0	8.0	8.0

※地力・生育量に応じて施肥量を加減する

◎追肥（穂肥）の目安（成分量kg/10a）

穂肥時期	N	P	K
出穂30～25日前	2～3	0.5～0.8	2～3
出穂14日前	0～2	0～0.5	0～2

※2回目穂肥実施後も異常高温による栄養凋落が予想される場合は、出穂前葉色診断を実施した上で、追肥の要否を検討する

◎土づくり肥料

肥 料 名		施用量 kg/10a	成分量 kg/10a			
			N	P	K	Si
一つ選択	元肥	えちご上越ソイル元気	40～60	—	8.0～12.0	1.4～2.1 4.4～6.6
		越後の輝きソイル米スター	30	—	0.3	2.1 9.0
		けい酸加里プレミアム34	50	—	—	10.0 17.0
	追肥	スーパーシリカプレミアム	30	—	—	— 9.0

※N:窒素、P:リン、K:加里、Si:ケイ素

☆施肥設計モデル

肥 料 名		施用量 kg/10a	成分量 kg/10a			
			N	P	K	Si
元肥と穂肥（分施肥体系）	一つ選択	土づくり肥料より一つ選択	（左記数値を参照）			
		高度化成オール14	50	7.0	7.0	7.0 —
		えちご上越専用穂肥チャレンジャー	27	4.0	1.0	4.0 —
	一発元肥体系	土づくり肥料より一つ選択	（左記数値を参照）			
一発元肥体系		晩生用高窒素一発元肥	35	10.5	4.0	1.75 —

※一発元肥体系でも、生育状況に応じて追肥（穂肥）を実施する